報告要旨
Bukovec, Vesna 先生のスロヴェニア語授業
2025 年 6 月 9 日

午後 7 時〜8 時 30 分

Zoom ミーティングに参加する
https://uni-lj-si.zoom.us/j/99678983910
Meeting ID: 996 7898 3910

使用言語：日本語（講演は日本語で行われます）
Language: Japanese (The lecture will be held in Japanese)

クロブチャルの帰還
―南スラヴ系捕虜の見た日本―

大津留厚
神戸大学名誉教授

大正 8 年 12 月 8 日起草の内田外相の在仏松井大使宛て書簡は以下のように述べていた。「在本邦仏国大使の申し出に基づき 11 月 14 日「アルザス」人俘虜一名「ユーゴスラヴ」人俘虜一名（Klobcar 大尉）を同大使館に引き渡し、また 12 月 2 日および 4 日「ユーゴスラヴ」俘虜合計 80 名を解放せり。右 80 名は前期 Klobcar〔クロブチャル〕大尉引率のもとに同 5 日本国に向け神戸を出帆せり」。（現代仮名遣いに直した＝大津留）
なぜ大正期の日本で南スラヴ人 80 名が捕虜になっていたのだろうか。彼らはどこでどんな生活をしていたのだろうか。そして彼らを率いて新生セルビア・クロアチア・スロヴェニア王国に帰還したクロブチャルとはどのような人物だったのだろうか。
南スラヴ系８０名の捕虜たちは、オーストリア＝ハンガリー帝国の東洋における常駐艦皇妃エリーザベト号の乗組員だった。オーストリア＝ハンガリーはドイツの同盟国で、ドイツと日本は 1914 年 8 月 23 日に交戦状態に入ったが、オーストリア＝ハンガリーと日本の外交当局は交戦状態に入ることをさけることで一致した。オーストリア＝ハンガリーは青島に停泊していた常駐艦「カイゼリン・エリーザベト」号を武装解除し、乗組員は当時オーストリア＝ハンガリーの租界があった天津に退避した。しかしそこにオーストリアの軍当局から「ドイツ軍とともに戦うべし」という指令が入り、兵士たちはもう一度青島に戻ってドイツ軍とともに戦うことになった。日本軍に敗北したドイツ、オーストリア兵は捕虜として日本本国に移送されることになった。「カイゼリン・エリーザベト」号の母港はアドリア海沿岸にあり、したがって近隣の南スラヴ系兵士が多数を占めていた。

オーストリア＝ハンガリーの兵士たちの多くは日本の捕虜収容所のうち姫路の三つの寺に設けられた収容所に収容された。ここに多民族国家オーストリア＝ハンガリーのミニチュア版が出現することになった。そこではミニチュアの「民族問題」が現れることもあった。1915 年になってイタリアが協商諸国側で参戦するとイタリア系兵士がいじめにあうということも起きた。日本の捕虜収容の基本は「同じ兵士として処遇するが、規律は守ってほしい」ということだった。
戦争が長期化する可能性が高まって、本格的な収容所が日本全国で 6 か所作られることになった。その一つが青野原で、ここにオーストリア＝ハンガリー兵の 8 割が収容されることになった。そこでの捕虜たちの日常生活の中でスポーツは重要な役割を果たしていた。サッカーは近隣住民との試合も行われ、住民たちもそれを楽しみにしていた。1 週間に一度は近くに、ひと月に一度は少し遠くに遠足も捕虜たちの楽しみだった。働くことも捕虜たちにとっては気晴らしになったし、生活費も稼ぐことができた。豚の飼育は収容所から少し離れたところで行われたので飼育係が出掛けるときには衛兵の監視が付いたが、豚肉やソーセージなど食生活も豊かにすることができた。近くの農家に収穫を手伝いに行くこともあって、そのした農家にクロブチャルが絵を描いてお礼をしたこともあった。その絵は現在も見ることができる。音楽の演奏や演劇の上演も行われたが、特に 1919 年 3 月 30 日コンサートはシベリアで苦しむ同胞のためのチャリティーコンサートと銘打たれ、青野原の収容所が世界の中に位置づけられることが確認できる。
1918 年 11 月に協商諸国と中欧同盟の間で休戦協定が結ばれると、捕虜たちは解放、帰国が可能になった。その中でチェコ系の捕虜の中にはシベリアで戦うチェコスロヴァキア軍団に合流することを希望するものもあり、彼らはいち早く解放されて、シベリアに向かった。南スラヴ系捕虜たちは協商諸国とオーストリアとの講和条約が締結された後で、結束してクロブチャルの指揮下、新生のセルビア・クロアチア・スロヴェニア王国に帰国することになった。そのことを端的に示している。

大津留厚　経歴と業績

1952 年生まれ。東京大学大学院社会学研究科国際関係論専攻博士課程単位取得退学。
大阪教育大学助教授、神戸大学教授を経て、現在、神戸大学名誉教授。国際学修士。
専門はハプスブルク近代史。

主な著作
『さまよえるハプスブルク―捕虜たちが見た帝国の崩壊』（岩波書店、2021 年）
『「民族自決」という幻影―ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国家の成立』（編著、昭和堂、2020 年）
『捕虜が働くとき―第一次世界大戦・総力戦の狭間で』（人文書院、2013 年）

『青野原俘虜収容所の世界―第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』（共著、山川出版社、2007 年）
『ハプスブルクの実験―多文化共存を目指して』（中公新書、1995 年／増補改訂版、春風社、2007 年）
『ハプスブルク帝国』（山川出版社、1996 年）